

アレルギーといえば、皮膚や眼、鼻、気管支の症状を連想する方が多いと思うのですが、口や肺、皮膚から、体内に取り込まれたものは、全身に影響を及ぼすのです。弱いところに集中して反応が出やすいのです。高度の精神作用が営まれる前頭葉は、脳の中では、最も新しく発達してきた部分である為、デリケートで障害を受けやすい場所であると思われます。

松村龍雄先生、アルバート・ロウ、セロン・G・ランドルフ、マーシャル・マンデルら各先達は、早くから、脳のアレルギーに気付き、症例や、アレルゲンを除く治療について発表し、現代社会では、脳のアレルギーが増えることを予測し、警鐘を鳴らしてきました。

30年程前に、変わった母子に出会いました。小学校入学前の女の子は、母から離れて診察室の隅にいます。母は、些細なことで急に腹が立ち、娘をひどく殴りとばすという。母には、食物アレルギーがあり、食事を変えることで、怒りの暴発は少なくなりました。

通常の生理用ナプキンに含まれる化学物質の皮膚・粘膜からの吸収により抑うつ症状に陥っていた方は、布ナプキンに変え、うつ症状が消えました。

気分が落ち込み、一日中起き上がれないで、仕事にも行けなかった方は、花粉や放射性セシウムが影響したうつ状態でした。花粉対策と、食品中の放射性セシウムを除染することで、元気になってきました。

化学物質に過敏な母は、殺虫剤や建物内の薬品臭で、わが子の名前を一時的に書く事が出来なくなると言いました。

小学校高学年の男児は、勉強についていけず、担任から、家庭教師をつけるように勧められました。アレルゲン除去により、3か月後には、学習に何の問題もなくなり、字がきれいになりました。

脳に重金属の蓄積が見られた自閉症の幼児は、キレート剤(コリアンダーリーフ)を服用し、更にアレルゲン除去により、友達への働きかけや、言葉が出てきて、保育士らを驚かせました。

不機嫌で、よく泣く乳児を、疲れた様子の母が連れて来ました。乳児は、眉間にしわを寄せて泣いていました。母乳の為、母の食事から乳児のアレルゲンを除き、タバコの煙も原因だった為、家族は禁煙をしてくれました。ほどなく、乳児は、機嫌が良くなり、笑顔が見られるようになりました。

このように、脳のアレルギーは、実に様々な症状を呈してきます。一見、アレルギーとは無関係に見える病気や症状の中に、食物アレルギーや化学物質過敏症が潜んでいるのです。それを見逃さず、原因を取り除くことは、第一に取り組むべきことではないでしょうか。また、乳幼児期は、特に脳の発達が著しく、大切な時期です。周囲の環境中の化学合成物質や食物アレルギー、重金属の蓄積等の影響を受けやすい為、特に配慮が必要と思います。